生活と権利を守る国民大会

夜空に映る提灯デモ

笹林公園に二万五千集う

「生活と権利を守る国民大会」は十二日東京、大阪、名古屋、福岡、札幌など全国一二〇カ所で一斉に行われたが、大牟田では午後五時三十分から笹林公園で大会を開催。手に手に提灯をもち大地評傘下三万五千人が参加、広場に収容できぬくらいの大集会となり、大会終了後は二隊に別れて提灯デモとなり、目貫通りに延々と火の海をつくつて盛会裏に大会を終了した。

この日笹林公園には特設舞台が設けられ、憲章とともに続々と広場に組合員が集つてくる。手に手にかざす提灯に交つて一米大のタイマツや一米四方もあるデツカイ箱提灯も登場する。

有明海に太陽が沈むころになると笹林の広場も人の波で埋つた。提灯あかりにクツキリと市役所の建物が夜空に浮かび、印象的なシーンをかもしだした。

川口大会実行委員長の挨拶につづき浦川社会党代表、共産党代表森田市議がそれぞれメツセージを送り「われわれの生活と権利を守るために岸内閣の不当弾圧をはね返し、汚職土屋知事のリコールに総力を結集しよう」との大会宣言文決議文を読みあげ、いよいよ二隊に別れてデモ行進に移つた。

上宮町を回り警察署前―築町通りの一隊と築町―警察署前の一隊に分かれ、提灯の灯も一入明るく華やかなお祭でもみるようである。六列縦隊のデモ隊は後から後からと寸断なく続き、眼を奪われた市民も沿道で黒山のようになつて見物している。

警察署から駅前への一隊と築町から警察への一隊は道路の左右をはさみ交差して行く。明せずして「ご苦労さん」「頑張れ」の声が両隊より起り、提灯が高々と掲げられる。遠くからみると全く火の粉を散らしたようで目も覚めるばかりにキレイである。

この日大会に参加した組合員、主婦たちは当夜の感想をつぎのように話つている。

吉田アツさん（宮原主婦分会）
一、夕方の時間を利用されても出席数には何等変ることはなく、十二日の昼ごろからは夕食の用意をと軒並にさそい合せて買い出しに出かけられる様子……久方振りに心のつながりが表に出て社宅一ぱいひろがつた感じがしました。

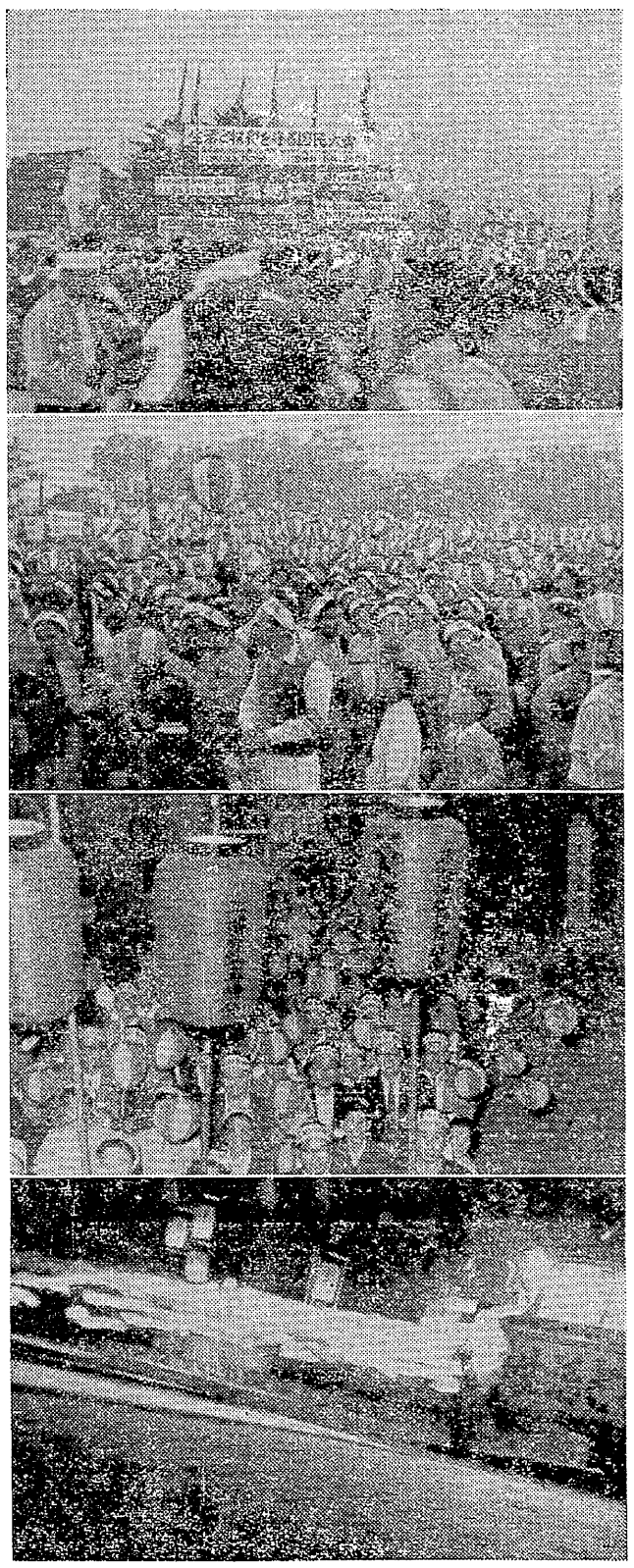
主婦の一人の声「一日位の決起大会参加はどの様な時間でもかまいません。たとえ毎日でも自分たちの総てですからやりとおさなくては」との声。

一、例のない提灯デモを行い返つて意気が盛り上つたと思う。まして子供を連れたほんとうの家族ぐるみの秋季闘争の立上り態勢がうかがわれた。

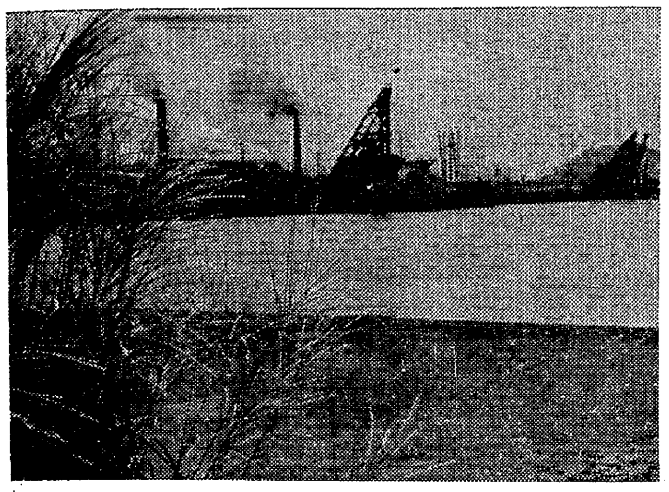
池田さん（三川）
非常にキレイだつた。会場の整理状態に問題はあると思う。行動隊など繰出してやるべきだつた様です。これも一つの訓練だと思う。東京では二カ所で三万だつたが大牟田では一カ所で三万五千も集つた。この点から闘いの進め方にも問題は残ると思う、闘いのできる所から起して行くべきだと痛感した。

B さん（宮浦）
大地評傘下としては画期的だつたし効果的でもあつた。それに時季もよかつた組合員も主婦もこういうことなら〝ヨカですね〟といつていた。欲をいえば大地評はもつと整理をうまくすべきではなかつたですかね。

また港務支部の港保線分会では感想を集約したところ「夜は疲れるし、女が可哀そうだ」という意見が圧倒的であつたというところもあつている。



【写真】上から続々と集る大会々場、提灯を手に手に嬉しそう、組合本部、宮浦のデモ隊、高張提灯が一際鮮やか、火の流れとなつて進む行進。



すすきの秋

秋は冷めたい宝石のかけら
きらきら光りながら
わたしの胸へころがりこむ

秋は透明なこころの鏡
そつとのぞいてみると
わたしの涙と微笑を映す

秋はわたしの白い柩
ひそかに地中へ埋めてみると
傍で虫がちろちろと泣く

（壺井繁治の詩〝秋〟から）

支部旗を寄贈

出来高分会で決定

港務支部出来高分会（三カ分会）ではさきの賃金闘争で残業時間に対する計算方法の問題で過去の精算方法に問題があるということでこのほど（前月）分会で取上げ交渉を行つたが、これで計算方法は分会の主張する通りいれられることになつた。このため一時金が払われたが、分会としては何か有用に使途したいということで話合つた結果各分会の分会旗と支部旗を作ろうということになつた。

現在旗店で分会旗、支部旗は註文に応じて作られていたが、出来上りしだい支部旗は組合の方に寄贈されることになつている。

熱心に受講

本部でガリ版講習

本部では職域、地域の機関紙（誌）発行のさかんになるのにつれて、よりよき活動のためにと、こんどガリ版講習会の募集を行つていたが、去る十三日（日）本部六会議室で午前九時から参加者二十名の出席で、講師を招いて講習会を行つた。

この日ちようど博覧会の日専連バレードとかち合つて市内はお祭さわぎに湧いていた。その影響もあつてか、参加者は余り振わなかつたようだつたが、参加者はせつかくの休みがつぶれるのもかまわず終日熱心に受講した。

午前中はガリ版の基本項目について講義、ゴシック、楷書体、ヤスリの使いわけ、鉄筆の状態、原紙についての注意などが話され、もつぱら理論をもとにし実習していつた。午後は色刷りや特殊ガリ刷りなどの高等編が講義された。

名、午前八時四十分の西鉄バスで大牟田を出発した。山頂に着したのは午前十時四十分、まず新三池炭鉱節を各自が歌いながらホークダンスに楽しんだ。ダンスの終了後は正午まで「若者よ」などの数曲のコーラスを行い、青々と澄み切つた山頂の空気の中に歌声は眼下に広がる筑後平野一杯に響き渡るように、若者たちの声は張り切つて響いていつた。

中食を済ました後は持参のボータブルで再びホークダンスをはじめこのほか狂句大会やバレー、バトミントンとつぎつぎに楽しいプログラムを進め、終日愉快なレクレーションをくりひろげ、午後六時十八分発の瀬高駅発列車で大牟田へと帰路についた。

なお、現在サークル員は四十八名毎週木曜日に本所支部でうたごえの練習を行つているが、この間、去る七十二時間ストのときは本所支部の各社宅へ楽団とともに進出歌の指導に当つたり、春の小岱山ハイキング、初夏の甘木山ハイキング、メーデー前夜祭、平和キヤンプ、唐津キヤンプ、九州のうたごえなど、うたごえ練習の余暇を見出してはレクレーションや各種行事に参加して、会員間の親睦を一そうはかるとともに、文化活動への進出も行い、目覚しい活動ぶりを示している。

着々結成へ

校区の連絡協議会

校区別連絡協議会結成は、その後着々と結成をみているが、本日までの結成校区はつぎの如くである。

十月五日　倉永校区（柿原年光＝三作）
六日　白川（田中＝本所）
〃　駛馬北（北原＝三作）
十三日　三池（吉村清昭＝本所）
〃　駛馬南（吉塚正信＝本所）
〃　笹原（森田＝宮浦）
〃　平井（本田＝三川）
〃　八幡（不　明）
十七日　笹原（高田＝三川）
〃　中友（不　明）
〃　有明（坂田仁吉＝三川）
〃　荒尾第一小（不　明）

※（　）内は議長。

賑々しく文化祭

市民会館で三日幕開け

合唱連絡協議会（合唱連協）では大牟田のうたごえを開く準備を行い、市との折衝によつて大牟田婦人会の協賛行事として大牟田のうたごえを来る十一月三日市民会館で開くよう準備が進められていたが、その後、劇団その他から参加の申込みがあり、うたごえだけでなく巾を拡げて市民文化祭にしようということになり、第一回の実行委員会でその決定をみた。

この日委員会で実行委員のスタツフとして実行委員長細谷治嘉（市長）副〃川口大地評会長（この外文化団体から一名）事務局長中山孝顕（歌声センター）副〃福島繁敏、財政横溝英輔（水曜会）宣伝小山国男（三鉱労）企画島本新太郎（表現座）山本敏乙（センター）渉外永江武一郎（自労）以上の顔ぶれをみてその後着々と具現化工作が進められている。

これによると従前市の主催で行われてきた文化祭を今年は在全各文化グループの主体性によつて自主的に行うこととなり、名前も「市民文化祭」と新ためられたが、これ自体が相当注目されてよいだろうし、今年度を皮切りにこんごずつとこの形態はとられるであろうなお、この機会に各文化団体のより強い協力関係を作り上げるために市民文化会議の結成気運が高まり、早速各団体代表を招いて十八日午後五時半から大地評で第一回準備会が開かれた。また文化祭は十九日に申込みを締切り最終的に決せられるが、うたごえサークル二十数団体、職場サークル、うたごえセンター数団体が申込みを行つており、これらのうたごえを主体として劇団表現座、仲間、井形バレー、ホークダンスなどの参加が確定をみている。

このほか、そうとう賑々しい番組で三日昼夜二回にわたつて行われ延八時間にわたる豪華なプロを展開することになつている。

また、センター関係としては遠く佐賀、筑豊をはじめ数地区からの出演も申込みがあつている。

山頂で大合唱

清水山でレクレーション

本所支部うたごえサークルではうたごえ結成一週年記念行事として清水山ハイキングを行い、深みゆく秋の清水山頂でコーラス、フオークダンス、バトミントンなど行い、楽しいレクレーションの一日を過した。

支部サークルの結成は昨年の十月十一日に新機構で結成されたものである。この日、参加者は二十二

四方八方こぼれ話

大人気ない

土屋知事リコールの説明を会社の体育館を借つて開くことにし、組合の山田法政部長が借用方を申し入れたところ「リコール問題については貸せません」といつた。会社は不正を働いた知事の肩をもち、不正を隠すのに一役買うのかヨーシと腹を立てているが、怒るのが大人気ないか、ケチケチ貸すのが大人気ないか。一寸考えものである。

名議長

荒尾一小校区連絡会議は十七日結成された。その余興！

北と南を結ぶ

組合本部にはときおり変な手紙がくる。一番多くくるのは長期ストの場合、脅迫文やスト反対文が多い。ところが最近、北海道の一主婦から、終戦後九州福岡県大牟田政治局の浦浜真光氏（荒尾市議、四山支部出身）が参加し、来賓としてメツセージをのべて、帰りに議長に、私も組合員だから来賓扱にせぬようにと話したら、議長曰く「来賓を予定していたが、お見えにならなかつたので、貴方に代行して貰つたのです」とは名議長

次は警官デモ

大牟田博、炭都まつり、提灯デモ

「コラツ引つこまんか」日専連のパレードで、お巡さんは汗だくだく、写真をうつす人達は一度、二度怒られても、記念すべき撮影をと全く決死の覚悟、たまりかねたお巡さん「何辺いつてもわからんとか」と一発、写真氏も負けていない。通り合せた若松の小平太はやしのヒヨツトコ面を指差し、あん奴がつらに似とるのー。

似とるのう

炭坑に、姉さんの子供がいて本年四十四才で、名前はH・I（特に名を秘す）という人ということで本部では早速調査したところ、三川坑勤務で万田社宅在住とわかり早速本人に連絡をとり、十数年振りの音信をつける役目を果すことになつた。